

廃校を活用した宿泊機能を持つ地域複合施設の計画

建築計画研究室 東 優月
(令和5年2月20日提出)

1. 研究の目的と背景

現在、日本では多くの廃校が発生している。2002年度から2020年度の19年間で発生した小学校の廃校数は5,678校にもものぼり、徳島県では140校の廃校が発生している。このような状況から、廃校の跡地活用の現状として、現存している施設のうち約3割は活用方法が決まらず放置されている。そこで、解決策の一つとして取り組まれているのが、文部科学省の『～未来につなごう～「みんなの廃校」プロジェクト』である。活用用途を募集している全国の廃校情報の発信やマッチングイベントの開催を通して廃校活用を推進している。

本研究では、現在休校中の鳴門市島田小学校・幼稚園の再活用計画を提案する。

2. 鳴門市の現状

鳴門市における0～14歳年齢人口は、2011年度からの6年間で760人減少しており、学校・幼稚園の小規模化が急激に進行している。さらに、小学校の児童数は、2016年度からの6年間で219人、約8.3%の減少が見込まれている。また、廃校活用について、鳴門市教育委員会は、文部科学省『～未来につなごう～「みんなの廃校」プロジェクト』に参加し、現在休校中である2校の有効活用に向け、民間事業者から活用用途に関する提案を募集している。今後、鳴門市では、この2校を筆頭に多くの人や企業に向けて周知する必要がある。

3. 廃校活用方法の提案

設計対象地である島田小学校・幼稚園は、徳島県鳴門市の島田島に位置し、鉄筋コンクリート造2階建ての建築物である(図-1)。小学校と幼稚園を合築した建物で、設計は、鳴門市に多くの建築物を残す増田友也氏がおこなっており、増田建築の特徴が多く見られる建築となっている。関西からの交通の便も良く、大阪市中心から約2時間、兵庫県神戸市から1時間弱、徳島市内から40分程度となっている。

(1) コンセプト

現在、島田小学校は地域住民に利用されている。その利用内容として、①地域住民の会合、②選挙時の投票所、③ソフトバレーやミニバスケットの練習、④地域の資源ごみ収集場所やイベント時の駐車場等、⑤避難所・避難場所がある。このように、休校中でも地域住民に根付いた施設となっているため、現在の利用も継続でき、宿泊施設としての利用用途を付け加えた複合施設として提案する。さらに、島田小学校は鳴門市に多くの建築物を残す増田友也氏が設計しており、モダニズム建築として貴重な建築物である。増田建築は、鉄筋コンクリート造や鉄骨造を構造体とし、コンクリート打放し仕上げの建物が多い。張り出した庇、独特な窓の配置など島田小学校にも増田建築の特徴とされる要素が多く取り入れられている。そのため、特徴的である増田建築の外観はそのまま残し、各部屋内装のリノベーションを中心に設計する。

(2) 1階の活用

1階には、レクリエーションルーム、会議室、シャワー室、受付ゾーンを配置した。シャワー室は、共用空間である宿泊室とは別の階に配置することで、周囲の視線を気にせず利用しやすい。外から出入り可能なドアが設置されていたが、安全性を考慮し、建物内からの出入りのみ可能な造りとした。本施設を利用する場合、初めに受付ゾーンに立ち寄り、その後目的の部屋に移動する。受付後は、正面玄関のみ出入口とする。

(3) 2階の活用

2階には、宿泊室、サンルーム、調理室、食堂、便所、指導者室、図書室、地域利用ゾーンを配置した。正面玄関を上がり左側は主に宿泊施設ゾーン、右側は地域利用ゾーンとした。利用目的や利用者ごとに使用するゾーンを明確に分けることで、それぞれが利用しやすい。一方で、どちらも利用できるホールや図書室のような公共部分では、地域住民と宿泊で訪れた人との交流が見込める。交流が増えることで、島田島の魅力をより

多くの人に周知することができ、再び観光目的などで島を訪れる人が増加することが望ましい。

宿泊室は、ベッド仕様と畳仕様の計3室配置した。床や天井に木材を使用することで、暖かさを感じる空間に仕上げた(図-2)。

各宿泊室から出入りできるサンルームを付け加えた(図-3)。床には芝生を敷き、全面ガラス張りとした。このガラス張りは、増田建築の特徴的な窓の配置をオマージュして設計した。宿泊室と連続し広さも十分に確保しているため、悪天候でもこの空間を利用できる。

調理室と食堂は並列で配置した。入口ドアは取り外して開放的にし、宿泊室の正面に位置するため廊下部分に壁を設置し、宿泊室と調理室・食堂を視覚的に分断する。調理室と食堂の動線は調理室から食堂まで人の交差が発生しないよう工夫した。

便所は、ホールから階段を上がった部屋に配置した。以前はホールに面する位置に吹抜けの状況で配置されており、プライバシーの面で問題があると考えた。そこで新たに1室を便所として設計し、プライバシー問題の解決を図る。

指導者室は、1室を壁で区切り2部屋にした。大人が主な利用者になるため、静かな空間になる場所に配置した。

図書室は、以前の本棚や机をそのまま活用する。宿泊者が空き時間に利用、地域の子供がふらっと立ち寄り本を読むことができ、宿泊者と地域住民の交流が図れる場になる。また、読み聞かせを行う、おすすめの本を紹介し合う等、宿泊者と地域住民の交流が図れる場になる。

地域利用ゾーンには、地域住民の会合を行う会議室と防災備品倉庫を配置した。会議室には黒板を残し、壁は木材に張り替え、落ち着いた空間に仕上げた(図-4)。また、防災備品倉庫を2室配置した。島田小学校は避難所、避難場所に指定されているため、必要な防災用品を常時保管し、災害時に対応できるように備える。

4. まとめ

本研究では、実際に休校となっている島田小学校・幼稚園の再活用計画を提案した。外観は増田建築の特徴を残し、内装の改修をメインに設計を行った。どのような機能や施設があると多くの人利用するか、地域住民に納得されるか、長期にわたり利用されるかなど、ただ施設を設計するだけでなく、その後の動きをイメージしながら設計することを重視して取り組んだ。

また、本研究を通して得た学校を改修する際の5つの要点をまとめる。①立地や周辺環境を活かした提案をすることが重要である。景色がいい場所、海や山などの自然が多い等、立地に合わせた利用の提案を行うとよい。②宿泊施設として再活用する場合、「学校に泊まる」という特別感があるため、学校の雰囲気や学校特有のものをそのまま再活用することも考える。③水回りの設備を整える。宿泊施設にはシャワーや浴室が必要になるため、新たに整備することが大切である。④断熱対策をとる。学校は冬場になると寒く冷えることが多いため、夜間も利用する宿泊施設の場合は特に断熱対策が必要だと考える。⑤今回の島田小学校のように建築物として貴重なもの、歴史のあるもの、価値があるものは、外観をそのまま残す、大幅な変更をしない等、保存に向けての配慮が必要な場合もある。また周囲の景観に合わせる等の配慮も必要だと考える。



図-1 島田小学校・幼稚園外観



図-2 宿泊室(畳仕様)



図-4 地域利用ゾーン(会議室)